炎症性腸疾患内科プログラム

【研修目標、到達目標】

炎症性腸疾患（ＩＢＤ）は、潰瘍性大腸炎とクローン病に代表されるいまだ原因が不明の難治性消化管疾患です。両疾患とも若年者に好発し、長期間にわたる療養が必要であるため、厚生労働省の特定疾患（いわゆる難病）指定を受けています。生活習慣の欧米化に伴い日本でも患者数の増加が著しく、2013 年度の厚生労働省報告によると潰瘍性大腸炎は約 16.6 万人、クローン病は約 4.0 万人となっており、専門施設以外でも一般的に遭遇する消化器疾患となりつつあります。現在、当院内科に通院中の IBD 患者数は約 2,000 名を越えており、研修期間中には多数の症例の診療経験を積むことができます。最終的な研修の目標は IBD の適切な診断、治療指針やガイドラインに準じた標準的な内科治療、治験を含めた最新の治療法、外科的治療適応の判断と連携などについて十分な専門的知識と技術を習得することです。上部、下部消化管内視鏡や小腸内視鏡、Ｘ線造影、超音波など各種検査に携わり、IBD の専門的な領域だけでなく消化器内科疾患全般の幅広い診療知識、技能を習得できるように考慮しています。

【卒後 3～5 年目（レジデント期間）研修内容】

＊卒後 3 年目 カリキュラム

炎症性腸疾患内科の病棟診療に携わり、消化器内科疾患全般の診療の基本をマスターします。病棟では、指導医（教員）ならびに臨床研修医とチームを組んで診療にあたります。入院患者カンファレンス、炎症性腸疾患外科との合同カンファレンス、症例（内視鏡写真、Ｘ線写真）検討会などに参加し、診断や診療能力を向上させます。各検査の責任医の指導のもと、上部消化管内視鏡、下部消化管内視鏡や X 線造影などの検査、治療手技をマスターします。教員の指導のもと、学会発表も行います。将来、専門医資格の習得を目指す場合には、日本内科学会、日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本消化管学会、日本大腸肛門病学会、日本カプセル内視鏡学会に入会します。

＊卒後 4～5 年目 カリキュラム

質の高い消化器内科疾患の診療が出来るように、引き続き臨床研修を行います。IBD を専門的に診る事も可能となり、外来、病棟、検査において第一線の医師として診療にあたります。IBD 以外の消化器疾患に関する臨床研修の継続を希望する場合には、関連の医療機関に出張(出向)勤務する事も可能です。

内科認定医の資格試験を受け、さらに受験資格基準を満たす場合には日本消化器病学会、日本消化器内視鏡学会、日本消化管学会、日本大腸肛門病学会、日本カプセル内視鏡学会などの専門医資格試験を受けることも可能です（当講座にはこれらの学会の指導医が在籍しています)。

IBD センターは本邦屈指の IBD 患者数を有する高次の専門医療機関であり、ほかの医療機関の消化器部門で IBD の専門的な診療経験を希望する医師に対しても、年間を通じたレクチャープログラムも用意し、半年～2 年間の受け入れも可能です。

また、IBD を臨床的あるいは基礎的に研究し、より高い専門性を獲得したいと希望する学内および学外の対象者には、大学院への進学も可能です。研究に従事して博士号を取得することは、大学ならではのメリットです。

【卒後 3 年目の他部署研修について】

総合診療能力のスキルアップのため、総合診療センターで、卒後 3 年目期間中に年間を通して、月 2 回の外来研修を、希望により行うことができます。

【カンファレンス、症例検討会等】

入院患者カンファレンスと炎症性腸疾患外科との合同カンファレンスは毎週月曜日に行っています。教育的症例検討会は月に 1〜2 週に一度、金曜日に行っています。また、レジデント（またはそれに相当する医師）が在籍する期間は、毎週教員によって IBD を中心とした下部消化管疾患の診断や治療に関するミニレクチャーが行われ、臨床能力の向上に寄与しています。

【関連病院】（下線病院は卒後 3 年目以降の臨床研修として派遣実績のある病院です。）

兵庫医科大学ささやま医療センター、西宮協立脳神経外科、府中病院、宝塚市立病院、神戸掖済会病院、協立病院、尼崎中央病院、東住吉森本病院、若草第一病院、明石市立病院、上が原病院、西下胃腸病院、河崎内科病院、浅香山病院、たつの市民病院、西宮回生病院、宝塚第一病院、大久保病院、守口生野病院、中井記念病院など

【指導医】

教授：中村　志郎
准教授：堀　和敏
特任講師：樋田　信幸
学内講師：飯室　正樹、宮嵜　孝子
助教：横山　陽子、上小鶴　孝二
特任助教：高川　哲也、河合　幹夫

【研修統括者】

学内講師：飯室　正樹

【問い合わせ先】

学内講師：飯室　正樹
TEL：0798-45-6663　E-mail：iimuro@hyo-med.ac.jp